



古川 元久 (ふるかわ もとひさ) 希望の党幹事長。愛知2区(名古屋千種区・守山区・名東区)選出。衆議院議員八期。1965年名古屋市生まれ。旭丘高校・東京大学法学部卒、在学中に司法試験合格。88年、大蔵省入省。在籍中米国コロロンビア大学大学院(国際関係論専攻)に留学。96年、第41回総選挙で衆議院議員に初当選。この間、内閣官房副長官、国家戦略担当大臣、内閣府特命担当大臣(経済財政政策・科学技術政策・宇宙政策)、衆議院内閣委員長等を歴任。

激動の総選挙から三カ月余り。希望の党幹事長として、政党の組織を盤石にすべく多忙を極める古川元久代議士に、総選挙を振り返り、希望の党のスタンス、これから目指すものなどについて聞いた。

――衆議院選挙の結果について。

古川 安倍一強政治を終わらせることを目指して希望の党と合流し総選挙に臨みましたが、三つに割れてバラバラに戦うことになってしまいました。当然、小選挙区では不利になり、選挙の焦点も、安倍政権の政治姿勢だったはずが、合流が分裂かなどに変わってしまい、「与野党のバランスがとれ緊張感のある政治体制」を目指したにもかかわらず自民党を勝たせてしまいました。安倍自民の政

治姿勢に対する不信感は、選挙に表れない結果になってしまい、その点に関しては責任を感じています。

――小池さんと希望の党の現在の関係が見えづらいたいのですが。

古川 小池さんは、現在は特別顧問で必要なら相談するという関係。会社にたとえれば、小池さんは希望の党の創業者であり、経営者は今の玉木代表。政党にとつての株主は、一〇〇〇万票近い票を入れて下さった皆さんです。

確かにまだ小池さんの党というイメージは強いです。しかし小池さんは「希望の党」の看板を立てたところまで、それ以降、玉木代表の下でオフィスを決め会社としての中身を作っています。今後私たちが作っていく政策で見ていたきたいと考えています。

――すると今後の希望の党は？

古川 幸か不幸か今回の選挙はわが党にとっては大変厳しく、そのため間違つて当選した、いわゆる「小池チルドレン」は存在しません。二〇〇九年の民主党政権の失敗の要因は、選挙で大勝した高揚感で勘違いをしたことがありました。希望の党は、イメージだけの支持率上昇と急落という中で戦いましたから、最初から高揚感はありません。「地に足をつけてやろう」と考えるメンバーがそろい、チルドレンも、二世三世もほとんどいません。

それに比べて自民党は、次世代のリーダーも含めて全て二世、四世で、世襲でなければ総理候補にもなれない状況です。選挙にも苦勞せず、当選したときから将来が

約束されているような人とは、私たちは考え方が根本的に違います。我々は「ベンチャー」として、

「歴史と伝統の自民党」と同様な党を作り対抗しようとするのではなく、ゼロベースから自民党とは違う新しい形の政党を作つて、「自民党に変わるもう一つの選択肢の政党になる」ことを目指したいと思えます。そうすることで二大政党制も可能となるのではないのでしょうか。

アメリカにはGMなど昔ながらの大企業もあれば、新たに生まれたグーグルやマイクロソフトのような大企業もあります。我々が目指すのは後者です。かつての民主党は自民党と同じような形の政党で短期間に大政党になろうとしたところに無理がありました。今回は自民党とは違う文化や組織・方法で、自民党に伍することのできる大政党になることを目指したいと思えます。

たとえば国政と地方政治との関係。私は前からこれに疑問を持っていました。これまでの政党は国会議員の下に県会・市町村会議員

がピラミッド型に連なる形になってきました。地方と中央では役割がそれぞれ違うのですから、縦に手をつなぐのではなく、横で手をつないでいくことを考えていきたい。まずはそのモデルを愛知で作ればと思います。民進党の大塚代表とは、その考えを共有できています。

追い込まれるものができてきます。まさに「百害あって一利なし」です。消費増税はどこかでやらなければなりません。タイミングが肝心で、景気が拡大局面で行うべきです。現在、アメリカは一〇〇

――消費税、税制について。

古川 現時点での消費増税、とりわけ軽減税率導入には反対です。軽減税率は低所得者対策にならないだけでなく、中小零細企業にとっては「廃業促進税制」です。

軽減税率導入で中小零細企業は大変な事務作業が増え、雇用の九割を支える中小企業の中には廃業に

本でも九〇カ月以上続いている。私は二〇一八年後半から一九年初頭には、経済は下降トレンドに入っていく可能性が極めて高いと考えています。このタイミングで消費増税をすれば、景気はさらに冷え込むのではないのでしょうか。もう一度、消費増税の使途やタイミングについて、最初から検討していくべきだと思います。

――政治家とは？

古川 議員になるには選挙の洗礼を受け、当選しなければなりません。自分の票は一票だけ。その意味では究極の他力本願です。他人に自分に一票入れてもらえるような人間にならなければならぬ。一種の人間修行のようなものです。私は政治家を目指したおかげで、自分の至らない所を皆さんに気づかせてもらってきた……政治家を目指してなければ自分ももっと嫌な人間になっていたと思います。

今、自分がこうしてここまで仕事を続けてこられたのは皆さんのおかげです。そんな感謝の気持ちを持って、世の中の役に立つ仕事をするのが政治家だと思います。

――新春のメッセージをお願いします。

古川 今年には明治維新から一五〇年。「分権型社会だった江戸時代」から「中央集権体制」に変えた廃藩置県が明治維新の本質です。この中央集権の仕組みが、今の東京一極集中や地方の衰退につながっていると思います。私は今年を明治以来の中央集権体制を根本的に見直し、分権型の国の形を目指す一歩にしたいと思えます。

江戸の分権型社会を作ったのは、愛知から出た徳川家康です。新しい二一世紀型の分権国家もまた、この愛知から作っていきたいです。(平成二十九年十二月二十四日取材)

自民党とは違う文化や組織・方法で 政党を作り分権型の国の形を目指す

古川 元久希望の党幹事長インタビュー